

112 学年度第一学期ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座
「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座 (16)

テーマ：国際秩序の変動と東アジア

森川裕二 教授 (第十六講座 / 要約)

2023.12.28

一、「地域 (リージョン) とはなにか」:主権と地理知識の問題思考

- 1.19世紀まで：中国の伝統的世界認識 (華夷秩序・中華秩序)
- 2.19世紀以降：ウェスタンインパクト, アジアの周辺化、西欧帝国主義によってパワーの世界に包摂されます
- 3.主権国家の要件:
 - ①領域 (territory) ②国民(population nation) ③主権 (sovereignty)
 - ④大国からの承認 (recognition)
- 4.現代東アジアの地理知識:「西洋の鏡像」のなかのアジア

19世紀末以降東アジアは西洋勢力の衝撃によって「近代国家」の概念が出現しました。日本も同じです。「東亜」「亜細亜」は政治的主張の中で用いられるのに対し、「東洋」は文化的・精神的な意味で用いられます。いずれも実体のない思想のなかの地域です。第二次大戦後の「東アジア」・政治的含意 (思想・イデオロギー) はほとんどなくなりました。

二、アジアから国際秩序を語る意味

1960-1990年の論争 (地域主義 regionalism)、地域のまとまり (凝集性) を何で評価すべきでしょうか。

- 1.文化的凝集性 (エスニシティ、人種、言語、宗教、文化、歴史)。
- 2.経済的凝集性 (貿易パターン、経済的補完関係)。
- 3.政治的凝集性 (政治体制の型,イデオロギー)。
- 4.組織的凝集性 (公式の地域的機構の存在)

科学的に地域の輪郭を定義する試みは、明確な結論を得ていません。

(Fawcett, Luise & Andrew Hurrell. Regional Organization and International Order,1995)

三、東アジアと国際秩序:「アジア」の主体性を考えること。

日本人、中国人、台湾人、韓国・北朝鮮の人、東南アジア諸国の人々は「アジア」をいかに観察し、考察し、理解しようとしてきたのでしょうか。

- 1.多様な専門分野の集合＝定型的な存在がありません。
- 2.国・地域の思想・イデオロギーの内在的視点＋国際関係の構造、とくに力の構造のみに。国際秩序＝主体＋構造（力）＋規範的価値観（≡世界観）に関わる問題点。例えば、帝国日本が中心になったアジアの国際関係を構想、アジアの民族が共有する価値観はなかった⇒戦争協力へ。
- 3.京都学派（西田幾多郎を中心とする哲学者グループ高山岩男、高坂正堯、西谷啓治、鈴木成高）は、アジアには欧米中心の世界秩序観ではなく、独自の世界秩序観がある。日本では、その中心は日本文化です。日本文化が主体となり、東洋でもない、西洋でもない新しい歴史哲学だと主張しています。
- 4.孫文(1866-1925)「大アジア主義」(1924)「今後日本が世界の文化に対して、西洋覇道の犬となるか、或は東洋王道の干城となるかは、日本国民の慎重に考慮すべきことである」と主張しています。
- 5.安重根(1879-1910)「東洋平和論」(1910)「東洋平和を維持し、大韓独立を強固にする」と露戦争宣戦布告を引用し、日本・朝鮮・中国の同盟を提唱しています。
- 6.竹内好(1910-1977)『方法としてのアジア：わが戦前・戦中・戦後』(1978) ヨーロッパが東に向かって自己拡大の運動を進める過程で、ヨーロッパ化に直面した非ヨーロッパが自己を自覚化し主体化していくとき、そこに成立する自己意識がアジアという観念をつくる（中国革命に着目）」といます。

まとめ:

今まで可視化された「アジア」などは存在していません。「実在を超越したアジア（超実在のアジア）」について、20世紀以前に「アジア」は哲学・思想のなかでのみ実在しています。21世紀の現代におけるアジア「実証主義のアジア」の実証方法は何か？理論は何か？について、国際関係の中で、アジア的要素が確認できるようになってきたと言えるでしょう。

中国語まとめ：徐 興慶

日本語翻訳：陳 順益

2023.12.30